

第十六章

結論

友人たちの30年間とオマハ族の研究を振り返ると、人々のある確かな性格が見えてくる。オマハ族の伝統は、かれらの置かれた環境の地形学的な条件がいつも極限の欠如により注目されてきた。気候についても一灼熱と乾燥の長い期間、あるいは、痺れを切らすような寒さに耐える期間；彼らは、彼らに衝撃を経験してきたこと、そして、火山帯で彼らが遭遇させられた気候を訴えてばかりいるのではなく；険しい山々や深い溪谷のような、著しく印象的な大地の形状に囲まれて生活して来たばかりではない。一方、彼らは、好適な場所、そこは、夏と冬が必ずしも異常なもとというものでもなく、そして、お互いに規則正しく交互にやってくるというような、そんなところで生活をしていたように思われる。また、昼と夜にしても、多くの場所で、必ずしも極端な対比をしているというわけでもなかった。この季節と1日の一様な動きは、オマハ族の気持ちに心から影響を与えていたようだし、安寧の気持ちに、そして、彼自身の生命の中で、そして、他のものとの関係の中で再生されることを懸命に試みをすべき高い道徳的な性格、人間にとって望ましいとみなされるような人になること、そのようなものの中にある気持ちに帰することに導いていたようだ。彼が正直であるという考えと結びついた性格がこれだ。季節と昼と夜との規則的な進行については、彼は、Wako^odaが人間に正直であるように教えた、そして、彼の言葉、行動が、依存している筈のものであると認識していた。強調が正直であることと、通常の平穏や、天の安定した正常な状態を破壊する嵐とか、稲妻と言ったように自然の力を通してのWako^odaに対する偽りの懲罰から、われわれは、どのようにして原理原則が生命、自然、そして、社会のあらゆる形態の安定性に正直である事が必要であるという考え方になるかと言うことを理解するのである。

自然を観察するこのやり方のために、オマハ族の神話が、他の多くの部族のそうしたもののより（もしその言葉が許されるのであれば）ずっと簡単であり、飾り立てられていないと言えるだろう。オマハ族は、自然とか、人間の生命を風変わりに見るよりもっと現実主義者であるようにされていたように思われる。この風変わりな態度が彼らを何分か、与えられた線に従って想像力に欠けるようにさせている傾向にあったのだろうが、其れが、感情的な態度よりも精神的な学問の上で彼らをもっと高い価値のあるものにおくようにさせているある種の性格の頑丈さに導いていた。

オマハ族は思慮の価値の評価が、彼らが、統治するものの権威の象徴としての神聖なる杖の採用することに、“彼らの目を開き、そして、眺めてきた”その時代からの経験を簡潔に物語っている彼らの神聖なる伝説（The Sacred Legend）の中に強く持ち込まれている。人々の状況を改善するためのあらゆる修得は心の鍛錬の結果であった。“そして、人々は考

えた”というの、あらゆる変化に対する前兆なのである；さまざまな新しい修得、親子同然の関係にある部族の統一の調整、そして、部族の強靱さの促進、と言ったものが、この考えから生まれる結論であった。毎年恒例の部族を挙げての狩、そこでは、そこでは、部族全体の人々の獲物のためという姿勢が求められていた；社会的な犯罪として、殺人に対する懲罰；ばらばらに崩壊させる戦闘の精神を抑制する努力、それを制御しようという努力、部族の統一を乱すよりもむしろ保護しようとさせること、—こうしたこと全てが、“思慮”の結果なのであった。それ自体は彼らがそれまでに見てきたそのものであった自然の課程に思いをめぐらせたものから生まれ出てくるある種の考えに基づいたものであるが、部族の組織そのものもそうであった。神聖なる伝説は、“そして、人々は考えた”と言うときには真実を話しているのである。

オマハ族は思慮深く、そして、現実的な人々ではあったが、彼らの儀式や典礼に見られるように一例えば、子供の誕生を宇宙に対して告知する、子供をその場に紹介し、部族の中のものとしての義務を課す、そして、死の存在において、嘆いている人々に同情を示す、と同時に、別れ行くものに対して、彼が、精神の領域への旅立ちにつくと考え、声援を送っていた。

他の全ての部族と同じように、オマハ族は、自然の光景を強く擬人化することがあった。全てのものが生命を持っており、そして、人間と同じような性格を持っていた。このことが、トウモロコシの儀式 (p. 261)、発汗小屋の儀式の中での石への態度の中に (p. 577)、そして、既に先に出てくるその他の典礼や儀式のなかにはっきりと示されている。人格の考え方は、言語のなかや、宗教的な信仰やその実行の中に主要な位置を占めている。この人格の中にある力は、望まれた結果になるように、そのようにひとの行動を指示している力でもあるが、意思のなかのそれとみなされていた。a “そして、人々は考えた”という文章の繰り返しにより、時代の経験を保護している神聖なる伝説が、改善された状況が不思議な干渉ではなく、いつも考え方の鍛錬によりよい改善された状況が達成されているという生き生きとして事実を強調していた。

このように、オマハ族は精神的にも、また、肉体的にも非常にしっかりした原住民アメリカ人の類であった；これは、基本的な政治家としての資質と社会的な秩序の保護と平和の維持の貯めに宗教的な動因の力を見出す能力とを兼ね備えた、芸術的な表現に対してよりも、産業的な表現により与えられているものであるが。人々は立派な闘士ではあったが、彼らの戦いと言うものは、ただ単なる達成のための競技場ではなく、(彼らの部族の与えられた名前が示しているように) 自分たちの住んでいるところと部族の本来の姿を守りながらとられた最も良い手段なのである。

a この動いている力は、あるいは、意思は、*wazkiⁿ*、これは男の中の支配的な力の使用を表している言葉を沢山交じり合せた中で使われていた言葉であるが、このように呼ばれていた。このよう *wie'washⁿ* は、(*wi*, “私;” *e*, 目的となるもののサイン; *wazhiⁿ*, “意思の力”) お互いに公平とされた彼自身の自由な意思で何かをすることを意味していた。オマハ族が、人間とか、動物たちにたいして目に見える助けとなるものではないと、うごいている鉄道を最初に理解した時には、名前は以前からあった言葉をこれに当てはめた: *e'wazhiⁿ nonge* (*nonge*, “走ること”) “自分の意思で走る”と。怒りは、*wazhiⁿ piazhi* (*piazhi*, “悪い,” “悪魔”) と呼ばれていた。従って、*wazhiⁿ piazhi* とは、意思の力が怒りで、悪魔と共に働き、そして、男は自分自身や他のものに災いをもたらすということを意味していた。親切心は、*wazhiⁿ çabe* (*çabe*, “保護されること言葉や振る舞いが用心深い”) という言葉が使われた。この言葉は、親切心を構成するものに対するオマハ族の概念を表している—自分の話をしていることを保護したり、あるいは、他のものを傷つけないように気配りをする時の自分の意思を使うときのものである。“忍耐” (*wazhiⁿ çnede*) を表現する言葉は、自分を制御する別の局面を持っている; *çnede* は、“長い” という意味で、忍耐強いということは人間の意志が与えられた身の振り方に対して明らかに長い間意思を持ち続けることを必要としているのだ。

もう一つの例は、考えること、差別すること、指揮をとる事、だから、影響力の大きい行動とこの力を直接に生み出しているからだ。: *wazhiⁿ çka* は、“影響”、“洞察力”、“聡明さ” (*çka*, “純白”、“明白”) を意味している。*Wazhiⁿ çka* という言葉は、見ているものの自然の経験の精神的な過程に当てはめられたものである。雰囲気は明白であるときには、対象となっているものは、明らかに識別されており、それらの特異性が意識され、そして、お互いの関係が注目されていたので、気持ちをはっきりしている時には、しかるべき決定であるように、洞察力というものが可能であった—それは、賢明さに伴っている言葉とか行いに導いていくものを理解する事のできる純白な、曇りのない精神なのだ。こうした複合された言葉は、重複されているはずだが、全てのものが、人々は、言葉の枠組みが行いの輪郭を表現している時に、導ききとその継続について考えているとの言述を確かなものにしようしているのだ。